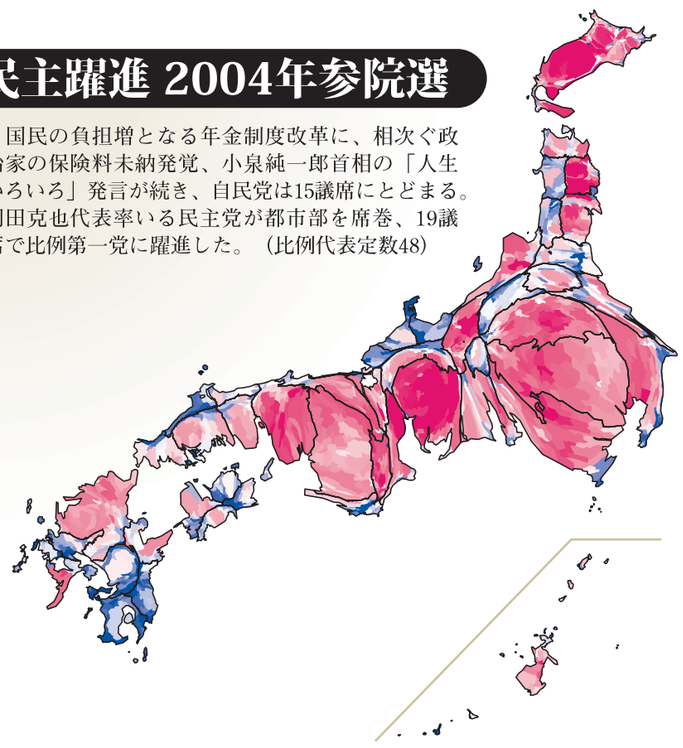
膨張民主 列島染める

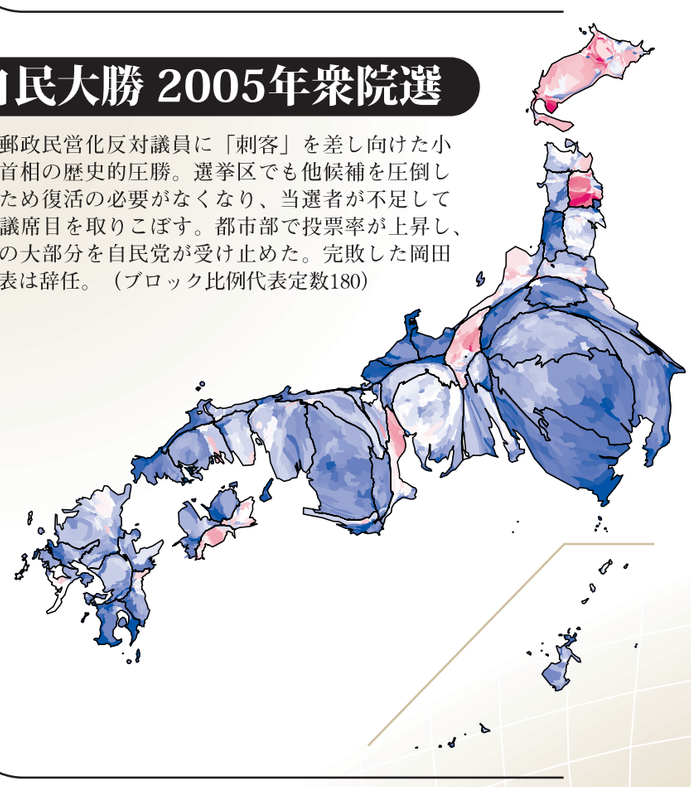
民主躍進 2004年参院選

国民の負担増となる年金制度改革に、相次ぐ政治家の保険料未納発覚、小泉純一郎首相の「人生いろいろ」発言が続き、自民党は15議席にとどまる。岡田克也代表率いる民主党が都市部を席巻、19議席で比例第一党に躍進した。（比例代表定数48）



自民大勝 2005年衆院選

郵政民営化反対議員に「刺客」を差し向けた小泉首相の歴史的圧勝。選挙区でも他候補を圧倒したため復活の必要がなくなり、当選者が不足して78議席目を取りこぼす。都市部で投票率が上昇し、その大部分を自民党が受け止めた。完敗した岡田代表は辞任。（ブロック比例代表定数180）



「票面積」地方でも拡大

青息吐息の自民

都市部で強いが、地方でもろい―。民主党にはこんなイメージがこれまであった。しかし、民主党と自民党の比例代表得票率をカルトグラムに反映させると、民主党は今回、議席占有率以上に自民党を凌駕（りょうが）し、列島全体を民主党色に染めた。

民主党が躍進した二〇〇四年参院選と比べても、北陸の富山、福井、山陰の鳥取、島根、四国の香川、徳島、九州の佐賀、長崎、宮崎、鹿児島といった三年前は青色だった保守色の強い地域が今回、県都を中心に赤色に塗り替わった。

民主党の〝膨張〟は、小沢一郎代表の戦略にも符合している。小沢氏は選挙期間中、北陸や山陰、九州地方を重点的に遊説。演説場所も繁華街より過疎地を選ぶ徹底した「川上戦略」を進めた。「川下」に当たる都市部の遊説は、菅直人代表代行や鳩山由紀夫幹事長が分担した。

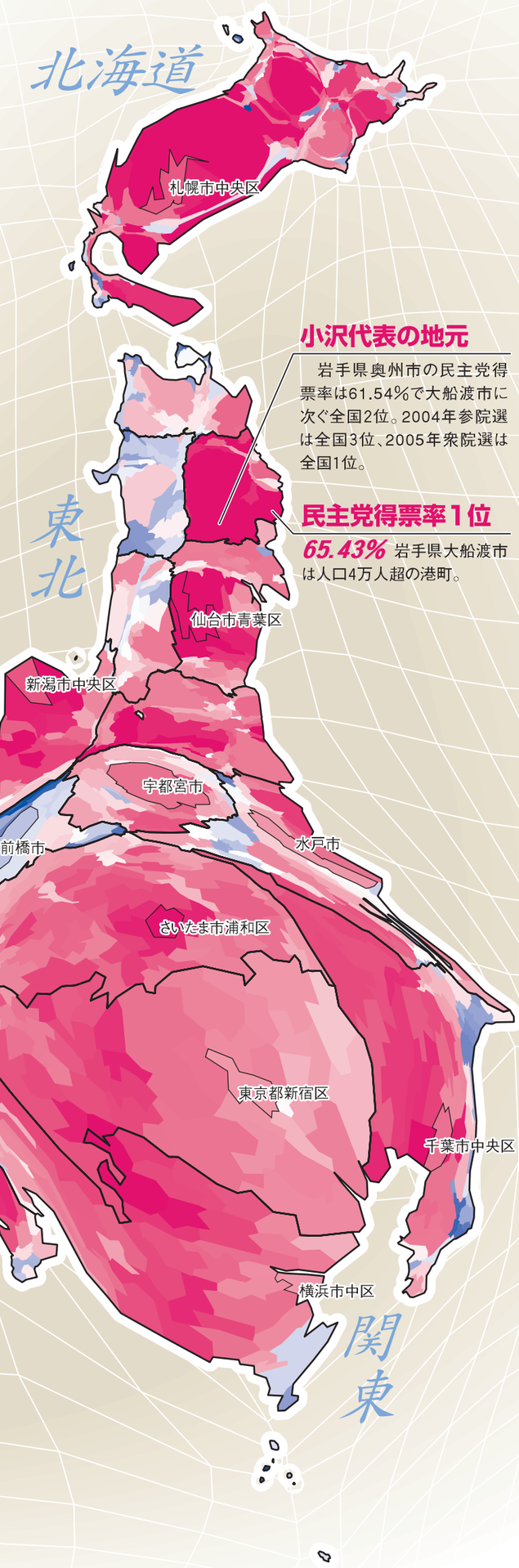
民主党はマニフェストでも、三つの重点的な「約束」の一つに農家の所得補償制度や中山間地域での百万人雇用プランを盛り込み、地方重視を売り出した。

年金不信や安倍政権批判の受け皿となっただけでなく、こうした自民党の〝お株〟を奪う選挙戦が、地方での大勝の下地となった。

郵政解散に伴う〇五年衆院選で自民党が、民主党が頼みにしてきた都市部の無党派層をつかみ「ニュー自民党」をアピールしたのとは対照的な今回の結果。戦略一つで攻守が入れ替わる選挙のダイナミックさが表れたといえる。

一方では、二大政党化が進むと、両政党の違いが薄れ「自民党の民主党化」「民主党の自民党化」が起こり得ることも、カルトグラムは示しているようだ。

（吉田昌平）



小沢代表の地元

岩手県奥州市の民主党得票率は61.54％で大船渡市に次ぐ全国2位。2004年参院選は全国3位、2005年衆院選は全国1位。

民主党得票率1位

65.43% 岩手県大船渡市は人口4万人超の港町。

安倍首相の地元

山口県長門市の自民党得票率は59.37％で、1万人以上の自治体では全国1位。党幹事長代理として先陣に立った2005年衆院選は53.86％で10位。

自民党得票率1位

65.13% 大分県姫島村は人口2000人余の離島。2005年衆院選でも1位。

人口を反映「エリアカルトグラム」

「民意」表現する試み

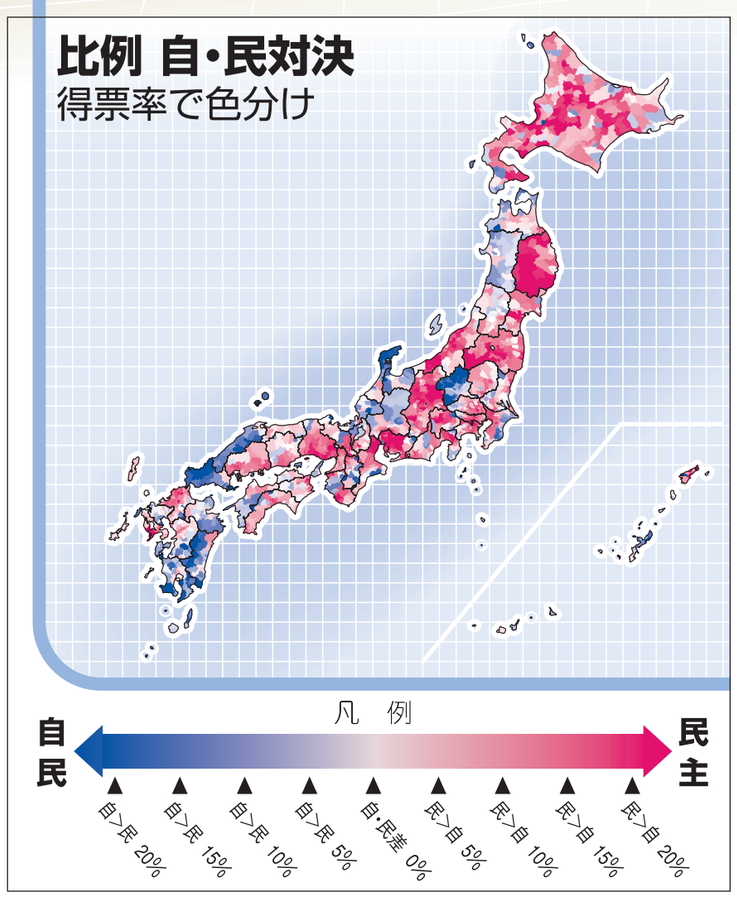
市区町村の票数（比例）を面積で表すと、都市部が異様に膨張した日本の姿が現れる。約十四万票の東京都新宿区と津市は、実際の面積では三十八倍以上違うのに同じ大きさになっている。「連続エリアカルトグラム」と呼ばれる統計地図の一種だ。

大接戦だった二〇〇〇年の大統領選を機に、米国で民意をより実態に近い形で表現する手法として広く使われるようになった。選挙戦では、共和党・ブッシュ候補（現大統領）は広大な中西部や南部で、民主党・ゴア候補は東西両岸の人口密集地で強かった。通常の地図で色分けすると共和党「圧勝」の印象を与えてしまうが、実際は得票数で民主党を下回っていた。

自民党は、自治体の総面積の三割で民主党を上回る票を獲得した＝左図＝が、そこに住む有権者は全体の一割にとどまる。上図は、民意が民主党の〝圧勝〟だった様子を描き出している。

計算機を使ったカルトグラムの研究は一九七〇年前後から始まった。本紙は、東京大学大学院工学系研究科の清水英範教授と井上亮助教の共同研究による手法を使って作図。市区町村の隣接関係は維持しつつ列島の形も極端に崩さぬよう変形させた。本州だけでも約二万五千本の連立方程式を解く計算はビジュアルテクノロジー社（東京都港区）に依頼した。

（松波功）



得票率は票数÷投票総数で、過去のデータは自治体の合併・分割などを反映した推計値で比較した。